

# 中日友好と仏教学者の貢献

楊 曾文

菅野博史 訳

中日両国は目と鼻の先にあり、二千年以上の友好交流の歴史をもっている。両国の経済、政治、文化に対して多方面にわたる重大な影響を生じてきた。一九七

二年の両国の国交回復以来、中日両国政府は二国間関係の発展を十分に重視し、時代に從って絶えず善隣友好の関係を増進させてきた。中日両国首脳は、一九九八年に共同して平和と発展のために努力し、友好協力パートナーシップを構築する共同宣言に合意した。二〇〇八年にはさらに進んで戦略的互恵関係を全面的に

推進する中日共同声明に合意し、両国の平和共存、世代々の友好、互恵協力、共同の発展を実現することを長期的な崇高な目標とした。<sup>(1)</sup>

中国社会科学院世界宗教研究所と日本の東洋哲学研究所が共催する「現代社会と宗教」のシンポジウムにおいて特別記念講演を依頼されたこの機会に、私はひとりの仏教研究者の角度から、中日両国の仏教学者が今後、両国の平和共存、世代々の友好を実現するために取るべき態度、果たすべき責任について話したいと思う。



は衆生の最終の帰結、国家の最高原則であり、臣民が普遍的に尊崇すべきものであり、日本もまた仏教を信仰して国を治め民を教化する根本とすべきであるということである。

隋朝の最も盛んな時期に、聖徳太子は隋に使節を派遣し、両国の正式な国交を確立し、前後二度にわたって留学生、学問僧を隋に派遣して学ばせ、中国から直接、仏教と政治・教育の文化を輸入するようにした。日本の木宮泰彦『日中文化交流史』（胡錫年訳、商務印書館、一九八〇年）の統計によれば、隋朝のとき、中国に派遣された日本の留学生、学問僧で姓名の記録のある者は十三人である。そのなかの学問僧は八人で、全体の人数のおよそ六十二％を占める。彼らは中国に留学し、長い者は十五年、二十四年、ひいては三十年以上に達し、儒学、政治法律、文化教育に対して比較的体系的な知識を持つだけではなく、たとい学問僧であっても、仏教に造詣が深いと同時に、また中国の儒学と政治教育制度に対して比較的深く理解していた。

日本の孝徳天皇は六四五年に即位した後、重臣を任

命し、国政の実権を握った。さらにまた、それぞれ隋唐に二十五年、三十二年留学した学問僧の僧旻、留学生の高向玄理を招聘任命して国博士とし、政治革新の施策を実施した。隋唐の政治体制を模倣し、天皇を最高責任者として、その下に二官・八省・一台（御史台）を設ける中央集権の政治制度を確立した。その期間には、また仏法の興隆に重要な地位を与え、仏教はさらに広がった。朝廷は、仏教の迅速な広がりに適応するために、

隋朝が鴻臚寺の崇玄署、唐朝が礼部の祠部によって仏教・道教の二教を管理するやり方を模倣し、治部省に蕃玄寮を設け、「僧尼令」を制定して、仏教の僧尼に対する規制と管理とを強化した。革新的なことを実施する過程においては、かつて隋唐に行って学んだことのある留学生と学問僧がみな重要な役割を果たした。日本の舒明天皇二年（六三〇年）から宇多天皇寛平六年（八九四年）まで、前後、遣唐使を十九回派遣した。そのなかの三回は何かの理由で行けなくなったので、実際には十六回だった。遣唐使を派遣すると同時に、また留学生、留学僧を同じ船で唐に派遣し留学させた。前引の木宮

泰彦著、胡錫年訳『日中文化交流史』の統計によれば、入唐の留学生、留学僧（随行僧を含む）、合わせて百三十八人のなかで、留学僧の人数は留学生を超えて百五人おり、なんと七十六%の多きを占めた。航海技術の進歩につれて、中日間を往来するものには、さらに中国の商船、新羅・日本の商船があった。中日の僧たちもまた常に商船に乗って両国の間を往来した。日本の奈良時代（七一〇～七九四）に盛んであった仏教の六宗、三論宗・成実宗・法相宗・俱舍宗・華嚴宗・律宗は、中国から直接、あるいは朝鮮半島を経由して伝わったもので、その後の日本における仏教の発展のために基礎を固めた。平安時代（七九四～一一八五）には、多くの日本の学僧たちは唐に行って天台宗・密宗を学んだ。最澄（七六七～八三二）、空海（七七四～八三五）は、帰国後、それぞれ日本の天台宗と真言宗（密宗）とを創立し、平安時代の最も影響力のある仏教宗派となった。中日文化の交流は、ただ仏教の日本における伝播と発展を推進したばかりでなく、同時にまた中国の政経、文教、哲学、史学、建築、芸術、医薬などを日本に紹介した。

日本は鎌倉時代（一一九二～一三三三）以後、外来宗教としての仏教はすでに民族化を果たし、相次いで浄土宗、真宗、時宗、日蓮宗等の民族的な特色を持つ宗派を形成した。これらの宗派の創始者は中国に留学したことがなく、日本の社会情勢や民衆の宗教心理のニーズに適応して、漢訳仏典と中国仏教の著述を新たに解釈して自己の宗派を確立した。同時に、以前からある法相宗、天台宗、真言宗等もしだいに民族化を実現した。このほか、さらに宋元から日本に伝わった禅宗の臨済宗、曹洞宗が幕府と武士階級の大きな支持のもとで迅速に広がった。宋元の禅僧は一般的にみな儒学に通暁しており、彼らは宋学（程朱の理学）の日本における伝播に対して重大な働きをなした。

中日両国の仏教文化の交流は、明清に至るまで、さらに近現代までなお進展してきた。日本と明朝が推進した勘合貿易のなかで、正使、副使を担ったほとんどすべては禅僧であった。彼らは中国にいる間も、仏教とその他の文化芸術の興隆に従事していた。明末清初、臨済宗の高僧隱元隆琦（一五九二～一六七三）は招請に応

じて日本に赴き仏法を伝え、臨濟宗、曹洞宗の二宗のほかにも、黄檗宗を創始し、同時にまた明清文化を日本に紹介した。<sup>(3)</sup>

中日の仏教文化の交流は、たとい古代にあっても双方向性のものであった。たとえば、日本の留学僧は中国での求法の期間、日本の歴史、文化、習俗等を中国人に紹介し、さまざまな場合に、中国の僧侶たちと互いに仏法を学ぶ経験を交わした。ある求法僧たちはさらに資財を寄付し中国の寺院の建造を支援した。日本の仏教界は中国ではすでに失われていた經典等を送り届けた。今、ただいくつかの有名な事例を取りあげよう。円仁（七九四～八六四）は最澄の後を継いで、円載と同道して入唐求法した。比叡山の座主、円澄は天台山国清寺への手紙と衆僧が提起した天台宗の教義に関する三十条の疑問を彼に託して天台山の僧に提出させた。入唐後、円仁は「還学僧」であるため、天台山に行くことができないので、円載に天台山に持って行かせ回答を得た。『日本国三十問謹案科直答』が現存する。その後、円珍（八一四～八九二）が入唐求法し、天台山における滞

在期間、天台大師智顛の墓龕、及び国清寺の大殿を再建するために出資し、また最澄が当時、国清寺に建てた僧院の改修に出資し、扁額に「天台国清寺日本国大徳僧院」と題した。五代の呉越国の王銭俶は、天台宗の典籍が非常に多く散逸していることを知り、黄金を持たせて日本に人を派遣して書写させ帰らせた。北宋の太宗雍熙元年（九八四）に、日本僧奝然等は入宋し、日本の『職員令』『日本年代紀』各一卷を献上し、日本の歴史、風土、及び文化情況を紹介した。全国には、五畿、七道、三島があり、全部で三千七百七十二都、四百十四駅、八十八万三千三百二十九課丁（納税義務を負った男子）があり、国王は一姓相伝で、すでに六十四世である。楊億はこれによって『日本伝』を撰述し、元世の編纂した『宋史・日本伝』を継承した。臨濟宗をはじめて日本に伝えられた栄西（一一四一～一二一五）は、宋で求法した期間、三百万を出資して天台山万年寺の三門、及び左右の廊下を修復し、あわせて観音院、大悲院、智者塔院を改修した。帰国後、人を派遣して巨木を搬送させ、天童寺の懷敏禪師がもと宏智正覚（一〇九一～一一五七）によつ

て建てられた千仏閣を再建するのを援助した。元代の日本僧、邵元（一三〇五～一三七四）は、中国で二十一年という長い間生活し、少林寺の首座に任じられ、漢文は美しく、招請に応じて少林寺の前住持の法照のために塔銘を撰述し、息庵禪師のために道行碑を撰述した。

日本の禅僧、無初徳始（？～一四二九）は、明の洪武七年（一三七四）、日本の使者、宣溪聞が明に入るのに従い、金陵の天界寺、全室宗泐禪師に随って嗣法し、後に成都の大隋寺の住持となり、明の太祖が尊崇した太子少師姚広孝（道衍）の推薦を受けて、永楽十年（一四一二）、北京の潭柘寺（龍泉寺）の住持となること、十九年の久しきに達した。死去するまで、潭柘寺の建設のために卓越した貢献をなした。近代以後、日本は、西方の人文科学の研究方法を参考として、仏教を研究し、多くの成果を獲得した。<sup>4</sup> これらの成果、および中国においてすでに散逸した経典が陸続として中国に伝わり、中国の仏教、乃至、人文科学の研究に大きな影響を与えた。要するに、日本は中国の仏教文化の発展に対しても重要な貢献をなしたのである。

仏教は、古代の中日文化の交流において、重要な絆と懸け橋の作用を果たしたけれども、ただ上述した紹介からわかるように、その影響は決して仏教に限られるものではなく、社会政治、経済、文化等に対して、すべて深遠な影響を与えたのである。

## 第2節 中日両国の仏教の近親血縁関係

日本の仏教は中国仏教を移植し発展させたものであり、両国の仏教には自ずから十分に密接な近親血縁の関係がある。仏教が日本に伝わってすでに千四百年の長きに達した今日、情況はどのようであろうか。二〇〇七年、日本の総人口は一億二千七百二十八万八千四百十九人である。日本の文化庁の二〇〇七年度の『宗教年鑑』の統計によれば、神道系の信徒は一億二千七百二十八万八千四百十九人、仏教の信徒は八千九百七十七万七千七百六十九人、キリスト教（新教・旧教を含む）の信徒は三百三万二千二百三十九人、諸教（神道、仏教、その他の宗教の要素を吸収して成立したが、各教に所属しない教派）の信徒は九百八十一万七千七百五十二人である。そ

のなかには個人の複数信仰や重複統計の現象によって、全国の宗教信者の数は、二億八百八十四万五千四百二十九人であり、はるかに全国の総人口を超過している。これによれば、日本で最も多い信者は神道で、次は仏教で、その次は神道・仏教・キリスト教の特色を持ったさまざまな新宗教の「諸教」（天理教、円応教、生長の家、世界救世教等）であり、最後は新旧キリスト教の各派である。しかしながら、布教の専門職員（教師）から見ると、仏教が最も多く、三十一万三千六百五十九人おり、次は諸教で、二十二万三千八百三十一人いる。<sup>(5)</sup>

日本仏教の現存する宗派は、天台宗系、真言宗系、浄土宗系（真宗系を含む）、禅宗系（臨済宗、曹洞宗、黄檗宗を含む）、日蓮宗系、奈良仏教系（律宗、法相宗、華嚴宗等を含む）を含んでいる。これらの宗派法系のなかには、みな仏教系の新宗教を含んでいる。日蓮宗系の新宗教のなかで百万人を越える信徒を持つものには、靈友会、仏所護念会、立正佼成会がある。しかしながら、一千万人の信徒を擁すると言われる創価学会は『宗教年鑑』の統計には含まれていない。

これらの仏教宗派の歴史、法系、教典、教義から見ると、すべて中国仏教と密接な血縁関係があると言わべきである。それらの宗派はそれぞれ特有の色彩を備えていると同時に、中国仏教と等しい、あるいは近い要素を備えてもいる。たとえば、中日の天台宗はどちらも隋代の天台大師智顛を祖師とし、天台山を祖庭とし、『法華経』と智顛の天台三大部、『摩訶止観』『法華玄義』『法華文句』を奉じている。真言宗は金剛薩埵―龍猛菩薩―龍智菩薩―金剛智三蔵―大広智（不空三蔵等の祖師を奉じ、『大日経』『金剛頂経』等を基本の教典とし、西安の大興善寺、青龍寺を祖庭としている。浄土宗系は、北魏の曇鸞、唐代の道綽、善導等の人を祖師として奉じ、山西の玄中寺、西安の香積寺等を祖庭としている。禅宗の臨済宗は、唐代の臨済義玄を祖師として奉じ、河北省正定県の臨済院を祖庭としている。曹洞宗は唐代の洞山良价、曹山本寂、雲居道膺等を祖師として奉じ、江西の洞山、曹山、雲居山等の地を祖庭としており、黄檗宗（もとは臨済宗に属する）は、明末清初に、日本に渡った隠元隆琦を祖師とし、福建省の福

清暉の黄檗山寺を祖庭としている。奈良の法系の律宗については、唐代の鑑真を祖師とし、揚州の大明寺を

重要な祖庭としている。華嚴宗は、唐代の法蔵等を祖師とし、『華嚴經』を基本經典とし、法蔵の『華嚴經探玄

記』『華嚴五教章』等を重要な教典としている。日蓮宗の創立者の日蓮は、中国に行ったことはないけれども、

天台宗の教判、実相、法華の「迹門」と「本門」等の命題と概念を吸収發揮し、『法華經』の経題を核心とする教

義体系を確立したので、『法華經』を翻訳した鳩摩羅什がかつて住んだ西安の草堂寺を祖庭と奉じている。日

本と中国の仏教はどちらも漢語系の仏教に属し、日本の各宗派の用いる經典は漢訳の仏教經典を中心として

おり、当然また日本語訳の仏教經典も流行している。したがって、今日に至るまで、中日の仏教の間の近

親血縁関係にはけっして断絶はなく、依然として牢固とした存在であると言える。仏教は中日両国の宗教で

あるばかりでなく、両国の伝統文化の構成部分であるので、仏教文化の両国の社会の各階層における影響は

とても大きいのである。これは今後、中日両国の世々

代々の善隣友好関係を發展させるための十分に重要な民衆的基盤の一つである。

### 第3節 中日の仏教文化交流の現代的意義

中日両国は古代以来、友好交流と相互扶助の関係を続けてきた。この関係は、前世紀の日本の軍国主義が日増しに深刻になった中国侵略戦争によって破壊されたけれども、戦後、とくに中日の国交回復以後、しだいに回復し、主権と領土の保全の相互尊重、相互不可侵、内政への相互不干渉、平等互恵、平和共存などの原則の基礎の上に、新しい善隣友好関係を確立した。両国は、経済、政治、文化上の交流において絶えず發展し、両国の経済、財政貿易、科学技術、ひいては国家の経済と人民の生活全体に対してみわめて重大な影響を生じた。現代の世界において、中国の迅速な平和の勃興によって、中日両国はどちらも世界の強国に昇り、アジア太平洋地区、ひいては世界の平和、安定、發展に対して、重要な責任と影響を持っている。中日関係は、中国の対外関係のなかで、最も戦略的意義を持つ二国

間関係の一つである。

中国の商務部の統計によれば、二〇〇六年までに中日の貿易額は二千億ドルを突破し、二千七十三億六千万ドルに達した。日本の財務省の統計数字によれば、二〇〇八年の中日の貿易額は、前年より〇・三%減少したけれども、依然として二十七兆七千八百三十六億円に達した。日本はかつて連続十一年、中国の第一位の貿易の相手国であったが、二〇〇四年から欧州連合、アメリカに次いで、中国の第三位の貿易の相手国となった。しかしながら、中国は今に至るまで依然として日本の第一位の貿易の相手国である。このほか、日本は中国の第二位の外国資本の供給地であり、二〇〇七年には中国に対する直接の投資項目は千九百十四項目であり、二〇〇七年末まで、中国に対する投資の累計項目は三万九千六百二十八項目であり、金額は六百十七億二千万ドルである。日本政府は中国政府に対して、約三兆三千百六十四億八千六百万円（約三百三十億ドル）の円借款を提供することを承諾した。二〇〇七年九月までに、中国は円借款、約二兆五千二百七億三千三百

万円を利用し、二百五十五項目の建設に使用した。中国の外国政府の借款を利用するなかで、日本の中国に対する円借款は五十%ほどに達した。<sup>(6)</sup>

中日の国交が回復した後、特に中国が改革開放を实行了した後、中日政府と民間の各種の交流も全面的に繰り広げられ、両国の自然科学と人文社会科学の研究領域、及び体育、教育、文芸、医療等の機構間の業務の交流に多くの成果を上げた。中日の留学生は両国を交流させ、両国人民の相互理解と共同発展を促進するのに重要な働きをなした。一九七八年より二〇〇七年末までに、中国を出国した留学生の人数の累計は百二十万人に達し、日本への留学生の数の累計は九十万に達した。日本から中国に來た留学生も絶えず増加し、二〇〇四年までに、累計、十万人以上に達した。<sup>(7)</sup> 中国から日本への留学生が学業成就して帰国した後、工業、農業、経済、貿易、教育等、及び各級の政府の部門に就職し、中国のさまざまな建設事業のために大きな貢献をなし、また中日の善隣友好の関係を継続して発展させるために、積極的な作用を果たした。中日両国の

関係はすでに十分に密切な段階にまで発展し、このような関係を継続して保持し発展させることは、中日両国と人民の根本的な利益に合致していることがわかる。まさに温家宝総理が二〇〇七年四月に、日本の国会で「友誼と協調のために」を発表した講演のなかで、「中日は和すればともに利益を受け、戦えばともに傷つく。両国人民の世々代々の友好を実現することは、完全に歴史の潮流と両国人民の願望に合致し、またこれがアジアと国際社会の強い期待である」と説いたとおりである。

しかしながら、中日の国交回復以後の両国の関係は、全体的に見れば、未曾有の発展を遂げたけれども、この期間にはまた日本の中国侵略戦争に対する観点（日本首脳の靖国神社参拝等）や、領土・領海、及び経済貿易の摩擦等の問題をめぐって、若干の曲折、困難が現われ、両国の人民の感情、相互信頼を傷つけ、両国の多くの領域の交流協調に対してマイナスの影響をもたらした、と指摘するべきである。以上のことは、人々に深く次のことを認識させた。つまり、両国の間において、た

だ経済商業貿易の交流を重要視し拡大することだけならば不十分であり、人文学術の交流の方面においても、絶えず拡大し力を注ぎ、両国の文化交流の広さと深さを拡大し、両国人民の間の心の疎通を増進させ、両国人民の間の相互信頼と友誼を増進させる必要がある、ということである。中国の学者、劉廸在は「誤解」によって中日の問題を隠すな」という文章のなかで、「中日両国の民衆の心の基礎は堅固ではなく、中日関係の基礎も安定していない。このため、中日の間の立体的な交流、つまり両国の文化、芸術、教育等の方面に対する双方の交流を提唱すべきであり、経済交流と同様に高く重視するべきである。……人間本位の政治外交は、文化を重視するべきである。中日の関係を促進するには、強い政治力によって経済と文化の両輪を推し進める必要がある。この二つの経済の巨人は、さらに多くの、さらに強い文化の感動を必要としている。したがって、双方の政治家はどちらも両国の文化交流をさらに重視すべきであり、このようにしてこそはじめて両国関係のバランスのとれた発展を実現することができる」と述

べている。筆者はこの観点に同意するものである。

昨年の五月七日、中国の胡錦濤主席と日本の福田康夫内閣総理大臣とは、よく時勢を見、歴史の高所に立って、深い意義を持つ「戦略的互恵関係の包括的推進に関する中日共同声明」に東京で署名し、両国間の戦略的互恵関係の確立を包括的に推進し、今後双方は、次の五つの領域において、対話と協調の枠組みを構築することを提案した。(1) 政治の相互信頼を増進すること、(2) 人的、文化的交流を促進し、国民の友好感情を増進すること、(3) 互恵協力すること、(4) アジア太平洋地域の発展にも努力すること、(5) グローバルな課題にも対応することである。そのなかで、第三項において明確に、「両国人民、とくに青少年の間の相互理解と友好感情を絶えず増進することは、中日の世々代々にわたる友好と協力の基礎の強化に資する。このために、双方は、両国のメディア、友好都市、スポーツ、民間団体の間の交流を幅広く展開し、多種多様な文化交流と知的交流を展開すること、継続的に青少年の交流を展開することを決定した」と提案している。これら

の要求によれば、今後、中日両国間において、多くの種類、多くのルート、多くのレベルの文化交流を実施することには、なすべきことが多く、広大な活動空間があるのである。筆者は、このなかには自ずから中日の仏教文化の交流も含まれると考える。

歴史はすでに証明している。中日両国の間には、深い仏教文化の交流を実施することを通じて、両国の仏教信徒と広大な人民の間の相互の理解と親近感を増進することもできたし、両国の仏教学を含む人文社会科学の交流と発展を促進することもできた。必ずや両国の経済、政治、幅広い領域の文化交流の持続的な実施のために、人民の心の底からの相互信頼、友情、強い活力を注ぎ込むであろう。

#### 第4節 中日の仏教学者は両国の世々代々の

の友好を実現することを促進するために多くの貢献をなすべきである

以上述べたところを総合すると、源遠流長の中日両国の文化交流史上、仏教はかつてきわめて重要な働き

をなしてきたし、両国の仏教の間には近親血縁の関係が存在している。両国は戦略的互恵を包括的に推進し、世々代々の友好的共存、互恵協力の発展的関係を確立するという現代の実践において、両国間の仏教文化交流を絶えず推進することは、両国の文化交流の一つの重要な部分であり、依然として現実的な積極的意義を持つていると言える。

それでは、中日の仏教学者はここにおいて、どのような有意義な仕事をするができるであろうか。筆者は、以下の数点を提起し、皆さんに考慮していただきたい。

(一) 中日両国の仏教の歴史的研究を強化し、中国、日本の仏教の通史、時代史、中日の仏教文化交流史、さまざまな題材の専門著作を執筆し、古代以来、仏教の両国における伝播発展の歴史を紹介する。両国の仏教文化交流史において、卓越した貢献をなした人物と事蹟を顕彰すべきである。たとえば、唐代の鑑真の日本渡来、宋代の道隆、祖元、明末の隠元等の人が日本に赴いて仏法を伝えたこと、日本の最澄、空海、円仁、

円珍、栄西、道元等の人が中国に来て仏法を求めた事蹟などである。中日の学者はこれらの著作を執筆することによって、古代の中日の文化交流史における仏教の地位、両国の仏教の近親血縁の関係を、両国のさらに多くの民衆に理解させ、双方の理解と友誼を増進させることができる。

(二) 中日の仏教学術会議を共同で举行し、両国の学者を組織し、専門の論文を執筆し交流を進めることは、両国の仏教文化の研究と学術のレベルのアップを促進することもできるし、両国の学者の直接の接触を拡大する機会を提供し、友誼を確立し、両国の学術と研究者の交流を継続して発展させるために、道を広げることもできる。たとえば、中国社会科学院世界宗教研究所と日本の中外日報社とが共同で行なった中日仏教学術会議は、前後十回開催し、延べ百人以上の人が会議に参加し、広いテーマにわたる論文を発表し、交流を行ない、非常にすぐれた効果を挙げた。このほか、世界宗教研究所と日本の東洋哲学研究所の共催になる学術会議、中国社会科学院仏教研究センターと日本の駒

澤大学禅文化研究所、花園大学国際禅文化研究所との共催になる「敦煌仏教」を中心テーマとする学術会議、さらに中国仏教協会の管轄下の中国仏教文化研究所と日本の仏教大学の共催になる十二回の中日仏教学術交流会議、中国人民大学が中日の学者を招集して開催した三回の中日仏学会議などがあり、いずれも円満な成功を得、両国の仏教研究を促進し、学者間の友誼を増進させるために貢献した。このような学術会議は、今後さらに継続して挙行できる条件を作り出すべきである。

(三) 政府間や民間のルートを通じて、両国の学者が相互に訪問し、先方の国の学校、研究機関を訪問し研修し、資料を収集し、専門著作を執筆する。また共同で考察、研究することを組織する。中国の改革開放の実施以後は、多くの学者が日本学術振興会や国際交流基金等の組織の資金援助を得て日本に行つて研修し、日本仏教の歴史、仏教文化、芸術に対する研究を推進した。同時に、多くの日本の学者は中国に来て、仏教文化の考察研究を進めた。

(四) 両国の留學生の交流を継続して拡大する。中日の仏教学者は両国の仏教学を専攻する留學生、大学院生を育成する面において、便宜を提供し、熱意をもつて教え、成果を挙げ、両国の仏教文化を継続して推進することのできる中堅の力を育成するべきである。

二十一世紀の第一の十年はまもなく終わる。中日両国の政府と民間の各方面の共同努力を通じて、両国の間には、必ず戦略的互恵の関係を確立し、平和的共存、世々代々の友好、互恵協力、共同発展の崇高な目標を実現することができ、中日の両国の共同の繁栄幸福のために、アジアと世界の平和、和諧、発展のためにも貢献をすることを、我々は信ずる。

二〇〇九年七月四日、北京華威西里公寓に於いて

注

(1) 新華社の報道によれば、日本政府の招待に応じて、中華人民共和国の江沢民主席は、一九九八年十一月二十五日から三十日まで、日本への公式訪問を行なった。

十一月二十六日に、日本の小渕恵三内閣総理大臣と「平和と発展のための友好協力パートナーシップの構築に関する中日共同宣言」（「中日共同宣言」）を発表した。中華人民共和国の胡錦濤主席は、二〇〇八年五月六日から十日まで、日本への公式訪問を行ない、五月七日に、日本の福田康夫内閣総理大臣と「戦略的互恵関係を包括的に推進する中日共同声明」に署名した。

(2) 以上、主に『後漢書・倭伝』、『三国志』魏志・倭人伝、『宋書』梁書の「倭国伝」などを参照。汪向榮、夏応元編『中日関係資料准編』（中華書局、一九八四年）にまとまった記載があり、参考にすることができる。

(3) 以上は、主に拙著『日本仏教史』（浙江人民出版社、一九九五年）による。その他、『新版日本仏教史』（人民出版社、二〇〇八年）、主編『日本近現代仏教史』（浙江人民出版社、一九九六年）を参照。

(4) 詳しくは、拙著『日本仏教史』の関連の章節、及び宋黄鑑筆録・宋庠整理『楊文公談苑』十三、十四則（上海古籍出版社、一九九三年）を参照。『宋史・日本伝』、日本の鎌田茂雄「中国で碑文を書いた日本僧」〔在中国撰写碑文的日本僧〕（楊曾文・鎌田茂雄編『中日仏教学術會議論文集』〔中国社会科学出版社、一九九七年〕所載）、明代の明河『補統高僧伝』卷十五（徳始伝）を参照。

(5) 日本の文化庁編『宗教年鑑』（平成十九年度）、共生会社発行。

(6) 以上のデータは、主に中華人民共和国商務部のサイト、

新浪サイト二〇〇七年一月十九日の報道、搜狐サイトの二〇〇六年度の中日貿易の状況に関する報道、「百度知道サイト」の二〇〇八年十二月七日に掲載された「二〇〇八年の中日関係の現状と発展の見通し」から引用した。

(7) 教育部の澳際留学サイト、留学サービスセンターの留学サイト等の報道による。

(8) 二〇〇九年六月二十六日、中国の「参考消息」に掲載。

訳者付記 論文の原題の日本語訳は「中日の仏教学者は両国の世々代々の友好のために より多くの貢献をなすべきである」となるが、著者の了解を得て、タイトルを縮めた。

（よう そうぶん／中国仏教文化研究所所長）  
（訳・かんの ひろし／創価大学教授）